

すれば、ある時間空間平均化スケールに対し、最大可能降水量というものが存在するのか、存在するとしたらそれは地域によってどの程度であるのか、という情報も河川計画に非常に有効である。おそらくは気象学・気候学的にもチャレンジングな課題であると思われるので、我こそは、と思われる方は是非挑戦して答えを教えてくださいと願う。

## 5. おわりに

とある会議の場で、東京大学社会情報研究所の廣井脩先生が、「情報は人命は守れるが、財産は守れない」とおっしゃったのを聞いたことがある。2000年9月の東海豪雨で、計画降水量の倍程度の強さの集中豪雨、既往最大をはるかに上回る洪水流量であったにも関わらず亡くなった方が10名であったことには、的確な気象観測、気象予測に基づく情報が果たした役割も大きいものと考えられる。人命も救える学問としての大気科学の今後の発展にますます期待したい。

最後に、一点だけ述べておきたいことがある。それは、川で命を落とす方の8割は、洪水時の川ではなく、普段の増水していない川で亡くなっているということである。洪水を上手に処理する、あるいは洪水を適切に予報するだけでは川で命を落とす方を減らすことはできない。こうした事実を知り、その対策を考える機会に出たその日に、沼口 敦さんのカヌー事故の訃報に接した。沼口さんは、工学系出身で気象学会では異端である筆者に分け隔てなく接していただき、大気科

学はもとより、研究者としての生き方、人間としての行動の仕方等いろいろなことを教えて下さった。沼口さんには筆者は今の研究教育人生を歩んでいなかったらと思う。沼口さんの冥福を心から祈ると共に、できるだけ多くの方が、危険を知って充分注意した上で、川と親しんで頂ければ、と切に願う次第である。

## 謝 辞

東京都産業労働局岩屋隆夫さん、国土交通省中部地方整備局河川計画課柿崎恒美様、可児様には快く資料を提供して頂きました。また、原稿作成にあたっては安形康さん、大楽浩司さんにもお世話になりました。ここに印して感謝の意を表します。

## 参 考 文 献

- 岩屋隆夫、2002：放水路の開発実態と成立条件に関する実証的研究、東京大学大学院博士論文、277 pp.  
 建設省、1976：庄内川水害史、建設省中部地方建設局庄内川工事事務所、95 pp.  
 建設省、1982：庄内川流域史、建設省中部地方建設局庄内川工事事務所、511 pp.  
 建設省、1989：20周年記念庄内川—その流域と治水史—、建設省庄内川工事事務所、497 pp.  
 宮村忠、2001：東海豪雨にみる流域治水と危機管理、Civil Engineering Consultant, No. 211, 16-19.  
 辻本哲朗、2001：2000年9月東海豪雨災害に関する調査研究、平成12年度科学研究費補助金研究成果報告書、代表辻本哲朗名古屋大学教授、278 pp.

## 第20回メソ気象研究会のお知らせ

日 時：2002年10月8日(火)(大会前日)14:00~17:00  
 場 所：北海道大学百年記念会館大会議室(大会D会場)  
 テーマ：「新しい観測機器から観えてくるメソ気象」  
 世話人：吉崎正憲(気象研究所)、坪木和久(名古屋大学地球水循環研究センター)、小倉義光(東京大学海洋研究所)  
 コンビナー：遊馬芳雄(北海道大学大学院理学研究科)、川島正行(北海道大学低温科学研究所)  
 内 容：前回大宮での春季大会では、ウインドプロファイラーやGPSネットワーク、新機能レーダー、衛星観測などの新しい観測機器の紹介が目を引きました。これらの新しい観測機器は特にメソスケール現象の解明に威力を発揮すると思うのです

が、講演時間の制約のため、器機の紹介が中心であったような印象を受けました。今後、これらの最新観測機器を使って明らかになる観測事実はたくさんあると思いますが、その第1回目として、今回のメソ気象研究会を開催したいと思います。興味ある方の多数のご参加をお願いいたします。

※講演者・タイトルなどの詳細なプログラムは、  
<http://www1.neweb.ne.jp/wb/crest-mcs/MSJ/A2002meso.htm> に掲載します。

連絡先：遊馬芳雄(北海道大学大学院理学研究科)  
 Tel: 011-706-2763, Fax: 011-746-2715,  
 E-mail: asuma@ep.sci.hokudai.ac.jp